

## 友人関係の在り方を査定するための児童対人関係様式検査の作成

Development of the Asami Children's Interpersonal Style Test (ACIST)  
for the assessing interpersonal relationships

綿引 麻美 (Asami Watahiki) 指導：菅野 純

## 問題と目的

幼児児童絵画統覚検査（以下早稲田版CATとする）は子どもの生活場面や対人場面を表し、図版を見て子どもが作った物語から対人関係の力動等を明らかにするものである（井川, 1955）。全て動物の絵で構成され、登場する主人公をリスのチロとし、子どもが自己と同一化したチロの立場から物語を作る点が早稲田版CATの特徴である。しかし、早稲田版CATはほとんど利用されていない現状があり（空井, 1991）、子どもの生活場面や対人関係の様式が変化したことが理由として考えられる。また、早稲田版CATには主人公や他の登場人物に対する気持ちを問う教示がなく、子どもが何を思っているかを問い、対人関係の様式をより明らかにする必要がある。そこで本研究では、

## 研究Ⅰ：早稲田版CATをモチーフにした新たな図版の作成

新たに友人関係の在り方を査定するための絵画統覚検査図版（児童対人関係様式検査：Asami Children's Interpersonal Style Test/ACIST）5枚を作成した。図版には現代の子どもの遊びや友人関係の特徴を表した。調査者が作成した図版を、臨床心理士の資格を有する大学教員2名、臨床心理学を専門とする大学院生12名と検討した。早稲田版CATに倣い、主人公はリスのチロとした。場面を限定して友人関係の相互作用場面を想起しやすくしたこと、自由に主人公を選べるように全てリスで構成していること、状況のイメージを促すために、登場人物の名前や年齢を決定すること、教示にチロやその他の登場人物の気持ちを問うものを追加したことがACISTの主な特徴である。

## 研究Ⅱ-①：児童に対するACISTの施行

【対象】関東近県の民間学童保育施設2箇所に通う小学2～6年生の児童計5名（男子1名、女子4名、平均年齢9.4、SD=1.62）  
【方法】早稲田版CATの教示を参考にし、新たに気持ちに関する教示を付け加え、ACIST図版を用いて話作りを实

施した。その後、児童の話作りの特徴を明らかにした。

## 【結果と考察】

【対人関係の相互作用場面の想起】多様な会話文、多くの登場人物の出現、チロの不安・心配等様々な感情の生起、興味の移り変わり、対人トラブルの生起等から、ACISTは対人関係の相互作用場面が想起する刺激であると考えられた。

【気持ちを考えることの難しさ】多くの児童は、感想で相手への気持ちを考えることの難しさを話した。なかには、今起きている場面で生じた気持ちではなく、相手の性格等を話している児童もいた。ここからACIST施行中は、今思っていることを常に児童に意識させることが必要であり、そのための新たな教示が必要であると考えられた。

## 研究Ⅱ-②：指導員の方へのインタビューの実施

【対象】研究Ⅱ-①の対象児童が通う学童に勤務し、対象児童の普段の様子をよく知る指導員（女性2名）。

【方法】児童の性格・遊び場面・対人関係等、指導員の方にインタビューを行い、研究Ⅱ-①の児童の話作りと比較した。

## 【結果と考察】

【チロの行動と児童の行動の一致】自分の思い等を相手に伝えることが出来る、集団遊びを好む、自分の時間を大切にすること、順番を守って待つことが出来る、相手の気持ちを考えることが出来る、友達に公平な態度をとることが出来る等、話作りにおけるチロの行動が、普段の児童の友達への関わりと一致している部分が多く認められたため、図版は児童の友人関係の様式を投影しうることが示唆された。

## 総合考察

ACISTは、図版や教示に更なる検討が必要であるが、図版から対人関係の相互作用場面の想起や、チロの行動と児童の現実場面での行動の一致が多く認められた。よって、ACISTは友人関係の様式を査定出来る可能性が示唆される。

反省点として、チロの気持ちが言動に反映されているかが分かりにくい点、明確になる新たな教示が必要であることが挙げられた。反省点に基づく改訂案として、児童を投影するチロの設定については、初めからチロを対象児童と同じ年齢・性別で固定し、話の中で他の登場人物との相互作用を検討すること、またチロの選択が偏った図版があったため、各登場人物が与える刺激がより一定になる新たな図版を用いてACISTを施行することが考えられた。